東奥日報社提供

東奥日報
2025年（令和7年）8月20日（水曜日）（5）

リンゴ農園DX化

顧客情報、樹木病歴を一元管理

関口さん（八工大大学院）アプリ開発

デジタルトランスフォーメーション（DX）で地域企業の課題を解決しようと研究を進めてきた八戸工業大大学院の関口結実さん（24）が、リンゴ農園の経営を助ける業務アプリを開発した。顧客情報や樹木の病歴を手軽に管理できるため、地域企業が直面する人手不足や事業承継といった課題の解消が期待できる。19日、関口さんが開発に協力した八戸市の岩舘りんご園を訪れ、アプリの使い方を説明した。

同大学院工学研究科博士前期課程1年の関口さんは、同大学工学部4年の秋から研究に着手。DXの活用法として地方ならではの課題に着目し、労力軽減を図るアプリ開発を進めた。アプリには、専門家以外でも手軽にシステムを構築できるツールを活用しており、関口さんは「利用者自身でのカスタマイズが可能」とPRする。

アプリを導入する岩舘りんご園は、家族経営の園内約3・6㌶で約300本のリンゴを栽培する。栽培や販売といった作業の大部分を副代表の岩舘岳さん（34）がほぼ一人で担っており、顧客情報などは全て紙で管理していた。

アプリでは、それら顧客情報や受注履歴、樹木の病歴といった計7項目のデータを管理。スマートフォンにも対応しているため、屋外の作業中でも樹木ごとに取り付けたQRコードを読み込めば簡単に樹木の管理情報を確認したり、入力したりすることができる。

岩舘さんは「自分が家業を継ぐ際、膨大な紙の資料を目の前にし、事業承継の大変さを痛感した。次の世代や血族以外への継承の可能性もある中で、新しい技術の活用は必要」と語る。その上で「作業軽減が見込める分、新しい品種の栽培など事業拡大にも挑戦したい」と意欲を見せた。

関口さんは「今後も自分の研究を地元八戸に還元していきたい。今回のような地域課題の解決を将来の仕事にできたら」と抱負を語った。（正井晶子）

園内のリンゴの木に取り付けたＱＲコードから、樹木管理情報を確認する関口さん㊨と岩舘さん＝19日午前、八戸市是川

※「この画像は該当ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」